

# 青少年教育・体験活動ボランティア養成研修

1回目：令和3年9月5日(日) 2回目：令和4年3月20日(日)

## 【目的】

青少年教育の体験活動を支援するボランティアに求められる知識や技能を習得し、当自然の家におけるボランティア活動の充実を図る。

【参加者】 1回目：30名（男子6名、女子24名） 2回目：13名（男性3名、女性10名）

## 【プログラムの内容】

### 1回目 オンライン

- 9:30 開講式, インフォメーション
- 10:00 ボランティア活動の技術
- 13:00 ボランティア活動の意義
- 14:45 青少年教育施設におけるボランティア活動
- 16:00 青少年教育施設に現状と運営
- 17:00 インフォメーション, 閉講式

### 2回目 日帰り

- 9:45 開講式
- 10:00 ボランティア活動の技術（アイスブレイク）
- 11:00 青少年教育について
- 13:30 ボランティア活動の安全管理
- 16:30 ボランティアの登録制度
- 17:35 閉講式

## 「ボランティア活動の技術」

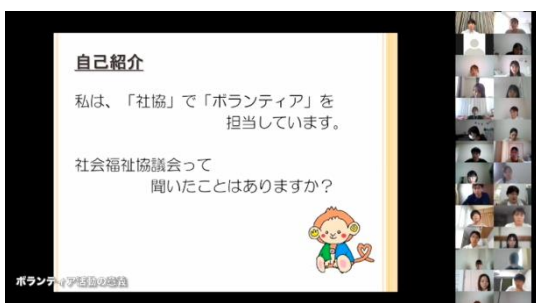
講師：国立山口徳地青少年自然の家 中塚契 黒田雅秀



オンラインでのアイスブレイクを行い、初対面の緊張をほぐした。グループワークを通して、ブレインストーミングを行いながら、コミュニケーションの重要性や人と人がつながるために大切なことについて理解を深めた。

## 「ボランティア活動の意義」

講師：山口市社会福祉協議会 藤林玲子氏



市内で実際に行われているボランティア活動の紹介を聞きながら、その意義について学んだ。活動する上で大切なことについて、参加者同士で意見を交換しながらボランティア活動について考えた。

## 「青少年教育施設におけるボランティア活動」

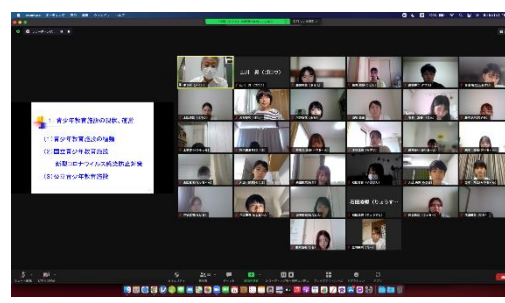
講師：先輩ボランティア



先輩ボランティアからボランティアを始めたきっかけや、活動の楽しさについて、実際の活動の写真を見ながら想いを聞いた。また、ボランティアを通して得られたこと等を聞き、実際の活動に向けて意欲を高めた。

## 「青少年教育施設の現状と運営」

講師：国立山口徳地青少年自然の家所長 平田博教



青少年教育施設とはどんな場所なのか、教育機能や役割について説明を受けながら、施設の現状を知った。コロナ禍での実情を踏まえ、青少年教育施設の今後の目標や、これからボランティアに期待されることについて学んだ。

## 「青少年教育について」

講師：国立山口徳地青少年自然の家所長 平田博教



青少年の基本概念から青少年教育の課題、発達段階の特性についての講義を受けた。また、体験活動に関する調査結果を見ながら、体験活動の必要性を知るとともに、本所の取り組みについて理解を深めた。

## 「ボランティア活動の安全管理」

講師：日本赤十字社山口県支部 松本俊祐氏



傷病者に対して自分が何をすべきなのか、CPRとAEDによる一次救命措置の手順や、三角巾をつかったけがの手当、傷病者の搬送法等、実技を通して学んだ。もしもの傷病発生時に備え、真剣に受講する姿が見られた。

## 【参加者の声】

- ・はじめは、もっと堅苦しいものを想像していたけれど、暖かい雰囲気でもとてもやりやすかったし、施設の方の対応などから、子ども達が安心できるような接し方を学べたと思う。(オンライン)
- ・ボランティア養成研修を受けて、改めて早くボランティアに参加して、多くの子供達と様々なことに挑戦しながら自分自身も子供達に対する接し方やどう支援していけば良いかなど学んでいきたいと感じました。(オンライン)
- ・今回初めて対面で研修を行うことができまして本当に嬉しかったです。他大学の人と話す機会はこれまでほとんどありませんでしたが、活動を通してお話することができました。ボランティアに必要な技術を学ぶことができ、よりボランティアへの意欲が増し、これからの活動が楽しみになる研修でした。(日帰り)

## 【成果】

アンケート結果について、オンラインでは満足度4（最上位評価）が7割、満足度3が3割、日帰りでは満足度4が9割、満足度3が1割であった。第1回及び第2回の両方を受講した修了者においては、全員から法人ボランティア登録を得られた。参加者アンケートの自由記述欄では、ボランティアへ参加することに対して前向きな姿勢や感想等が多く見られた。

## 【課題】

従来は1泊2日で事業を実施していたが、今回は新型コロナウイルス感染症の流行を受け、オンラインや日帰り等、実施形態の変更を余儀なくされた。また、1回目と2回目の実施に期間があいてしまったこともあり、当初の申込者全員に全日程を受講してもらうことができなかった。1回目だけの受講者へのフォローを含め、コロナ禍でのボランティア養成のあり方を検討していく必要がある。